

平成25年度 学校運営連絡協議会実施報告書

1 組織

- (1) 都立蔵前工業高等学校 学校運営連絡協議会（全日制課程）
- (2) 事務局の構成
1 学年主任、2 学年主任、機械科主任、電気科主任、建築科主任、設備工業科主任
計6名
- (3) 内部委員の構成
副校長（評価委員）、経営企画室長、教務部主任（主幹教諭）、生活指導部主任（主幹教諭）、
進路指導部主任（主幹教諭）、3 学年主任（主幹教諭）、総務部主任（主任教諭・事務局長・評価委員）
計7名
- (4) 協議委員の構成
学識経験者（大学関係者）、学識経験者（大学関係者）、近隣中学校長、近隣警察署員、近隣町会長、
卒業生採用企業取締役、PTA会長、同窓会長
計8名

2 平成25年度学校運営連絡協議会の概要

- (1) 学校運営連絡協議会（第1回～3回）の開催日時、会場、出席者、内容、その他
 - 第1回 平成25年6月27日（木） 本校小会議室、内部委員7名、協議委員7名
協議委員委嘱、委員紹介（自己紹介）、主旨説明、本校の現状と課題説明、意見交換
 - 第2回 平成25年9月27日（木） 本校小会議室、内部委員6名、協議委員6名
宿泊防災訓練の状況視察
 - 第3回 平成26年2月14日（金） 本校小会議室、内部委員7名、協議委員5名
学校長挨拶、学校評価アンケートの結果について、本校の教育活動について、協議・意見交換
- (2) 学校評価委員会の開催日時、会場、出席者、内容、その他
 - 第1回 平成25年6月27日（木） 本校小会議室、内部委員2名、協議委員7名
今年度の評価アンケートについて
 - 第2回 平成25年9月27日（木） 本校小会議室、内部委員2名、協議委員7名
学校評価アンケートについて
 - 第3回 平成26年2月14日（金） 本校小会議室、内部委員2名、協議委員5名
学校評価アンケート結果の分析・考察、課題の整理、評価報告書の検討

3 学校運営連絡協議会による学校評価

- (1) 学校評価の観点
「学校への理解」「学校の意欲」「学校の実践」の観点で実施する。
- (2) アンケート調査の実施時期・対象・規模
 - 12月 生徒： 回答率 100%（昨年度：98.5%、一昨年度：95.9%）
保護者： 回答率 82.4%（昨年度：73.4%、一昨年度：63.8%）
教員： 回答率 80.4%（昨年度：78.2%、一昨年度：100%）

(3) 主な評価項目

学校運営、学習活動、生徒指導、進路指導など

(4) 評価結果の概要

5年間の比較ができる形でグラフ化した。

質問1 本校に入学してよかった。

生徒の入学満足度は年々高まっている。保護者の大半は入学させてよかったと考えている。教職員の大半も肯定的にとらえているが、施設、設備の充実や部活動の活性化が進めば、さらに満足度は上がると思われる。

質問2 本校での学校生活や勉強は、自分の将来にとって役立つと考えている。

9割以上の、生徒、保護者、教職員が生徒の将来に役立つと考えている。

質問3 学校内の施設・設備は充実している。

生徒が半数、教職員は7割が否定的な回答である。

質問4 学校では、「進路のしおり」等を活用し早い時期から進路指導に取り組んでいる。

肯定的な回答が生徒で約7割、保護者で9割以上であった。

質問5 先生は、分かりやすい授業をするために、授業の工夫・改善を行っている。

実際に授業を受けている生徒の肯定回答が、年々増加している。

質問6 先生は、授業で分からないことがあれば個別指導や補習をしてくれる。

生徒の肯定的な回答が、年々増加し8割を超えている。

教職員は生徒からの申し出や生徒の理解度・習熟度に応じてしっかり対応している状況が分かる。

質問7 先生は、国家資格・検定試験等の資格取得指導を熱心に指導してくれる。

生徒の肯定的な回答が、年々増加し8割を超えた。

質問8 企業や大学関係者の説明会・講演会などが多く、進路選択に役立っている。

生徒の肯定的な回答が、徐々に増加している。しかし生徒の選択肢すべてに対応することが出来ていないのが現状で、生徒の3割は否定的な回答となっている。

質問9 学校は、将来社会人になるために必要な教育（キャリア教育）を行っている。

生徒の肯定的な回答が、年々増加し8割を超えた。

質問10 進路選択に必要と思われる進路情報は、充分提供されている。

生徒、保護者の肯定的な回答が増加し約85%を示している。

質問11 心の悩みや不安を相談できる体制が整っている。

生徒の65%が肯定的で、毎年増加傾向にある。

質問12 体育祭や文化祭などの学校行事に満足している。

今年度は肯定回答が増えた。昨年度実施しなかった球技大会が復活したことで、生徒の満足度は増加したと考えられる。しかし否定的な意見では、文化祭での「飲食店の数を増やしてほしい」や「やる気のない教員がいる」という自由意見もある。

質問13 ホームルーム活動は充実している。

生徒、保護者、教職員ともに肯定回答が増加している。

質問14 学校では、基本的な生活習慣が身につく適切な生活指導が行われている。

生徒の肯定的な回答が毎年増加し、8割を超えた。

- 質問 1 5 学校は、授業参観や学校行事などの取組を、学校外へ積極的にPRしている。
保護者の肯定的な回答が8割を超え、生徒も7割を超えた。
- 質問 1 6 学校は、地域との交流やボランティア活動などによく取り組んでいる。
生徒、保護者、教職員ともに肯定意見が増加し大半を占めている。
- 質問 1 7 校舎内の美化に、積極的に取り組んでいる。
保護者の肯定意見は8割を超えているが生徒に否定意見が4割もある。

(5) 評価結果の分析・考察

① 学校運営について

質問 1、2 (入学満足度、将来に役に立つ) を見ると、評価は総じて高い。特にこの5年間の生徒の満足度は肯定意見が増加している。

質問 1 5 (学校外へのPR) についても、肯定意見が増加している。これは、行事ごとに更新しているホームページの充実や、蔵ネットによる情報伝達を取り入れた成果と考えられる。しかし、教職員の「あてはまる」が減少している。これは、広報の役割を果たしている教員はいるが、他の教員は、他の業務の増加により、余裕が無く取り組めていない現状があると考えられる。

質問 3 (施設・設備の充実度) について、更新時期を過ぎているような施設・設備が多く、その面で求めている教育活動が十分にできないという現状である。工業高校での施設・設備は高額のものが多いことから学校の自立経営予算ではカバーできない。このことは他校との比較や生徒の満足度にも関わり、生徒募集にも影響を与えている。早急の対応が求められる。

② 学習活動について

質問 5 (授業の工夫) については、肯定的な回答が増えている。これは、ICT機器の活用や習熟度別授業による個に応じた指導、学力向上推進事業、学力スタンダードを見据えた授業改善の成果であると考えられる。また質問 6、7 (個別指導、資格取得) への取り組みについて、8割以上が肯定意見になった。工業高校を目指す生徒は、入学前から資格取得を目標にしている生徒も多く、教員の指導体制も充実してきたと言える。ジュニアマイスター顕彰に対する意識の向上も成果につながっていると考えられる。

しかし、授業の工夫については生徒の否定的な回答もあるので、授業力を高めていく努力が必要である。また、生徒自身も授業を受ける姿勢について振り返り、良い授業を相互に作っていく努力も必要である。

③ 特別活動について

質問 1 2、1 3、1 6 (学校行事、ホームルーム活動、地域交流) については、肯定意見が増加した。これは、球技大会の復活を願う生徒の意見を聞き入れ開催したことや、奉仕をきっかけとする活動、モノマチへの参加、ボランティア部の活動、交通安全ボランティアへの協力など教職員の積極的な発信や取り組みによる成果であると考えられる。

しかし否定的な意見では、文化祭での「飲食店の数を増やしてほしい」や「やる気のない教員がいる」という自由意見もある。また、教職員の質問 1 2 (学校行事に力を入れている) に関して、否定意見の割合が増えている。資格取得、技能習得などの指導に時間が費やされること、書類作りや手続き、若手教員の学習指導案の作製やその指導など、他の業務が年々増加し、そこに時間を取

られてしまい、余裕がないことによる影響ではないかと考えられる。

組織として業務を分担し、生徒指導の時間を確保する努力が必要である。

④ 生活指導について

質問11（校内相談体制）は充実してきている。これは、特別支援教育活動の成果であると考えられる。スクールカウンセラーが配置されたことや教職員の日頃からの目配り、きめ細かな保護者との連絡が成果を上げていると考えられる。

質問14（基本的な生活習慣）については、全校一斉に行う身だしなみ指導や、毎日の校門指導の成果であると考えられる。毎年、卒業式で約4割の生徒が3ヵ年皆勤や精勤で表彰されている。これが蔵工のスタンダードであるという自覚も身に付いていると考えられる。しかし定着には、日頃の努力が必要なので、今後も指導体制を整え、根気強く取り組まなければならない。

質問17（校内美化への取組）について、保護者の肯定意見は8割を超えている。しかし、生徒の否定意見が4割もあることから、実際にはそれほど積極的に取り組んでいない生徒も多いということが分かる。やらされるのではなく生徒が自ら積極的に取り組むように、校内美化による様々な好影響を理解させ、実践する必要がある。

⑤ 進路指導について

質問4、8、9、10（早期取組、説明会・講演会の充実、キャリア教育、情報提供）について、肯定的な回答が増加した。これは、教職員全体で生徒の進路実現を目標とした活動の成果であると考えられる。

早期取組については、入学前の学校説明会の段階から、卒業後の進路について発信している事、LHRでの「進路のしおり」の活用や、進路希望調査の回数を増やして意識付けをしたことが大きく影響していると考えられる。また、現場見学会や社会人による講演会、卒業生による講話、LHRを利用して就職内定者とのディスカッション、資格取得に向けた授業や講習会、技能検定への取り組みなど、多くの行事の成果であると考えられる。

情報提供については、生徒進路委員の役割を明確にし、実践したことや、進路資料室を閲覧しやすいように工夫したこと、資料の見方を分かりやすく解説した「進路のしおり」の改訂、過去の試験問題や報告書などを教員が生徒に提示しやすいように工夫したことなどが数字に表れていると考えられる。

しかし、就職希望者の内定率は、ほぼ100%であるが、第一希望への内定率は75%（昨年度は、60%）である。今後は、期末考査後の時間等を利用して、企業訪問や社会人・大学生との交流、将来につながるガイダンスをさらに充実させ、進路選択に対する意識の向上を図るなど、さらなる工夫ときめ細かな指導に向けた努力が必要である。

4 学校運営連絡協議会の成果と課題

(1) 学校運営連絡協議会を実施して得られた成果

- ・新たな視点で学校を見直すと共に、学校と地域との相互理解を深めることができた。
- ・協議会での意見交換や学校評価アンケートの結果が今後の学校経営計画作成にあたって有益な指針を与えてくれた。
- ・昨年度より始まった宿泊防災訓練の様子を見ていただいた。本校では、浅草消防署による梯子車訓練

の実施を始め、YKK、ノルメカエイシアなどの民間企業の協力、台東区役所、地域消防団、そして蔵前警察署の協力のもとに実践的な訓練を行うことができた。こうした訓練に対し、見学をされた協議委員からは高校生として地域に協力できる実践的な取り組みが行われていたと高い評価を頂いた。

(2) 学校運営連絡協議会を実施して明らかになった課題

- ・ 学校の情報が保護者に伝わっていないことが課題は、PTA活動などにおいても問題とされていたことから、昨年度からPTAの協力のもと携帯電話を使った情報サービスを始めた。情報発信としての効果をあげている。
- ・ 教科指導において生徒と教員の意識のずれがある。学力向上推進事業などの開始により、生徒の学力分析などを行い、目標とすべき学力を意識するようになってきた。26年度より全都立高校で実施される学力スタンダードなども踏まえ、学力の向上、授業の改善に向けた研修・工夫・努力は不可欠である。
- ・ 進路指導については、今年度の就職試験での結果報告を受け、受け入れる現場サイドからは、面接においても変化球をつけるなどをして生徒の目的意識・能力・資質を見ている、といったアドバイスを頂いた。また、先輩から仕事を学ぶ上でコミュニケーション能力と素直さが要求されている。これらを身につけるために、早期からの社会人に向けた意識付けが重要である。

5 学校運営連絡協議会及び学校評価を活用した教育活動の改善事項

(1) 学校運営

- ・ 学校長の「学校経営計画」に今回の課題に対する、具体的な改善事項を挙げ、企画調整会議や主幹会議などでも有効に利用することで、各分掌・教科・企画室関係へ働きかける。
- ・ 「開かれた学校」を目指し、地域との交流を深め、学校のホームページを始めとして様々な形での情報提供を工夫する。

(2) 学習活動

- ・ 26年度より全都立高校で学力スタンダードが実施される。25年度は、試行校で実施されていたが情報が十分とはいえない状況にあった。こうした動きの中で、「スペシャリストの育成」に向けての工業高校（蔵前工業）としての学力を再点検していくことが涵養である。そして、3年間のスパンで生徒たちをどのように育ていくかという目標を普通科と専科で作成していく必要がある。
- ・ 現在、若手教員の研究授業に参加する教員も多くなってきた。また、「学力向上推進事業」による生徒の学力分析、授業計画も求められている。さらに、進路指導においても生徒の学力が課題であることが明確となった。こうした流れの中で上記の3年間のスパンでの授業計画、教員相互の授業見学などを実践していくなどにより授業力を高め、それが進路実現にもつながる形で教科指導を行われていくことが求められている。

(3) 特別活動

- ・ 学校行事やホームルーム活動、部活動などは活発ではないという声は多い。業務の適正な分担、行事や職務の精選などを含め、教員の生徒への関わり方を改めて見直す中でその活発化をはかっていく必要がある。

(4) 生活指導

- ・ 身だしなみ指導は、一定の成果をあげているが、生活指導部にその多くを任せている現状がある。今後は、様々な教育活動の中での身だしなみ指導を教職員全員が共通認識を持って生徒に向き合うという態勢が問われている。

(5) 進路指導

- ・「スペシャリストの育成」は進路指導の核となるものである。各科での指導、担任による指導、学年による指導と個々の部署だけでなく、進路指導部がリーダーシップをとって10年後、20年後につながる3年間を通した計画的な進路指導を行っていく。

(6) 教職員

- ・「個」の力も大切であるが、学校という「組織」の力は生徒への指導にはきわめて重要である。教務、生活、進路、学年等々の各分掌が綿密に連携を取り合うことで、無駄を省き、効率の良い教育活動が実現できる。そのための体制作りが急務である。